令和　5　年度

第　1　回
総合教育会議会議録

行橋市教育委員会

令和　5 年　5 月　29 日(月)

総合教育会議会議録

1　招集日時
　　令和　　5 年　5 月　29　日(月)　　13 時 ～

2　招集場所
　　市役所　第２委員会室（5階）

3　出席者

市　　長	工藤　政宏
教 育 長	長尾　明美
教育長職務代理者	吉兼　法子
教育委員	村上　信哉
教育委員	桃坂　克己
教育委員	鬼頭　良典

4　欠席者　　無

5　出席職員等　　井上教育部長
　　吉本教育総務課長
　　三田井指導室長
　　井上学校管理課長
　　森生涯学習課長
　　増田文化課長
　　門司スポーツ振興課長
　　末次教育政策係長

6　議題及び議事の大要

　　別紙

7　閉会　　14 時　4 分

総合教育会議
令和５年５月２９日
開議　１３時００分

１．開会

〇教育政策係長　末次麗子君

定刻となりましたので、ただいまより総合教育会議を開催いたします。

本日は、お忙しい中、御出席いただきまして、ありがとうございます。

それでは、お手元に配付させていただいております、令和５年度第１回総合教育会議、協議事項に沿って進めさせていただきます。

まず、総合教育会議の設置者であります工藤市長より、御挨拶をいただきたいと思います。

工藤市長、よろしくお願いいたします。

２．市長挨拶

〇市長　工藤政宏君

皆さん、こんにちは。きょうは、平日のお忙しい時間帯にもかかわらず、こうやってお集まりいただきまして、ありがとうございます。着座をさせていただきます。

きょう、私も就任して、実は第１回目の総合教育会議ということで、またですね新聞なども賑わしておりますけども、いま議会とも、いろいろなこともありまして、なかなか落ち着いたかたちで皆さん方とお話する機会もございませんでした。今回こういった機会をいただきまして、事実上のキックオフといったかたちで、今回ざっくばらんに、私がイメージするような教育、その一部をちょっとお話させていただきたいと思います。

実際、きょうはこんなかたちで、ちょっと若干堅苦しい感じですけれども、６月議会が終わってからは、もうちょっと砕けたかたちで、皆さんとやり取りする時間ができればなと思っております。きょうは忌憚なき率直な御意見、御質問等をいただければと思いますので、何とぞよろしくお願いいたします。以上です。

３．協議事項

〇教育政策係長　末次麗子君

ありがとうございました。

続きまして、協議事項に入る前に、総合教育会議について、事務局より簡単に説明をさせていただきます。

吉本課長、よろしくお願いします。

○教育総務課長　吉本康一君

それでは総合教育会議につきまして、説明をさせていただきます。本日Ａ４カラーで両面印刷しております、総合教育会議について、という資料を御覧いただきたいと思います。

まず、総合教育会議の概要でございます。この総合教育会議は、首長と教育委員会の協議･調整の場ということで､地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部改正が、平成２７年４月１日施行ということで行われまして、各自治体に設置をされているところでございます。

御存じのとおり自治体の教育行政、こちらは、自治体の教育委員会が執行しているわけでございますが、予算編成や議会への条例の提案、施設の設置などにつきましては、法律上、首長の権限となっております。しかし近年ではＩＣＴ教育の推進やコミュニティスクールと地域学校協働活動の一体的推進をはじめとして、首長と教育委員会が協力して取り組まなければならない課題も多くなっているところでございます。

そこで総合教育会議は、市長と教育委員会が十分な意思疎通を図りまして、地域の教育の課題やあるべき姿を共有して、より一層民意を反映した教育行政の推進を図ることを目的としております。

次に、総合教育会議の議題でございます。総合教育会議では、次に記載している３点に関する協議または調整を行います。

１つ目、教育行政の大綱の作成に関すること。２つ目、教育を行うための諸条件の整備など重点的に講ずべき施策に関すること。３つ目、児童生徒などの生命または身体を守らなければいけないような緊急時に講ずべき措置、以上３点となっております。

裏面をお願いいたします。最後に総合教育会議の結果の遵守義務でございます。総合教育会議におきまして、事務の調整が行われた事項につきましては、市長と教育委員会がともにその調整・協議の結果を尊重しなければならないこととなっております。

以上、簡単でございますが、説明を終わります。

○教育政策係長　末次麗子君

ありがとうございました。

それでは、ただいまから協議事項に入りたいと思います。

工藤市長、議事の進行をお願いいたします。

～行橋市における教育行政の展望について～

○市長　工藤政宏君

ありがとうございます。

それでは、今回の会議でございますけれども、協議事項である行橋市における教育行政の展望について、まず私の考えをお伝えし、その後に教育委員の皆様方から御意見をいただくということで、よろしいでしょうか。

（「はい」の声あり）

ありがとうございます。それでは、僕から早速お話していいということですかね。

（事務局「はい、よろしくお願いします」の声あり）

はい、分かりました。

じゃあお手元に、きょうはスライドを用意させていただいておりますけども、前のほうを御覧いただければと思います。

まず、改めましてですけれども、市長の工藤です。よろしくお願いいたします。あと本当に日ごろから行橋の教育行政に関しまして、皆さん方には月１回の定例会をはじめ、様々なかたちで、今回、例えば入学式、卒業式なんかもそうですし、いろいろなシーンでお力を貸していただいております。本当に感謝申し上げます。

また新たなメンバーに鬼頭委員が加わられたということで、また若い、実際に現場も経験されたような方ですから、率直な御意見を期待しております。よろしくお願いいたします。

（鬼頭君「よろしくお願いします」の声あり）

それでは、短い時間ですので、かいつまんで説明させていただきたいと思いますけれども、タイトルは、このようにさせていただきました。行橋市の目指す教育について、ということで、これは私がちょっと思い描くようなことをまとめさせていただきました。

これは後ほどレジュメのほうで見ていただくとしまして、私は、もともと教育に関心がありまして、もともとは中学校時代に韓国にホームステイをしたのがきっかけで、非常にホストファミリーに良くしていただいたんですけれども、中学校のときに新聞を見たら、韓国の若者たちが日本人を嫌っている、というアンケート調査を見まして、結構ショックを受けまして、単純な発想で、じゃあ韓国の子どもと日本の子どもが同じ学び舎で喧嘩をし、お互いのバックグラウンドの違いも知りながら、でも共に学ぶ、共に育つような場、すなわち学校のような場をつくることができれば、自然と日韓の問題って、僕らの世代では解決できるんじゃないか、みたいな安易な発想で、そもそも学校をつくっていくというようなことに、段々興味を持つようになりました。

そこから日韓関係だけではなくて、日本の教育そのものをどうにかできないだろうか

というようなところで、自分としては、中学校時代は、私立の学校をつくるというのが、結構自分の中でも大きな目標となって、でも人づくりから徐々に徐々にまちづくりといったものに関心をもつようになった感じですね。ですから大学時代なんかで言うと、日大に行って、それでその後、学習塾に勤務したのも、やっぱり教育に関心があるからである、といったところですね。

そして２０１１年の東日本大震災を茨城で経験しまして、その翌年の２０１２年の行橋市議会選挙に立候補しまして、そして昨年３月、行橋市長に就任したというかたちです。いま現在、ことし４６歳になる年です。

皆さん方に御心配をおかけしました。ちょっとまず市の行政のことからお話したいと思うんですけれども、令和５年度の当初予算を３月議会に上程したんですけれども、これは賛成少数で否決をされました。これは民意で選ばれた議員の皆様方が決めたことですので、これは重く受け止めております。非常に重要なことだと思っておりますので、これは重く受け止めております。

ただ、とは言っても、別に突飛な政策を入れ込んだわけでもありませんし、どちらかというと堅実な政策だったと思っておりますので、この当初予算３０２億円を否決されたということは、僕自身、納得はいっておりません。職員もかなり汗を流してつくってくれましたし、本当に変なことは入れていません。もちろん精査していけば精査していくほど、もっともっとより精度の高いものというものはできたかもしれませんけども、ただ否決されるまでには、本来至るものではなかったのではないかと、実は今でも思っております。

ただ、やはり議会が否決というかたちでしたので、３月下旬に改めて臨時議会を開かせていただきました。そして約２６億円縮小しまして、２７６億円の予算をつくりました。教育行政で言いますと、これは下から２番目、教育費ということで、当初予算２９億円だったものを２６億円に削減をさせていただきました。これは骨格予算というものをつくったんですが、簡単に言うと、市民生活に著しく、本当に甚大な影響を及ぼさないような予算組です。

こういう予算を、２７６億円の予算をつくらせていただいたんですが、例えば泉小学校のそば、あさぎ屋というケーキ屋さんがあります。あさぎ屋さんの十字路辺りから小学校までの間、ここの道路を拡幅する予算なんかを１回削っています。これも政策的な判断のものなので１回骨格予算から削りましょうと。これについて、こんなものは削らなくてよかったんだ、という御意見を言う方もいらっしゃるんですが、これはある程度全体の秩序を見たときに、やはり１回削るべきだろうと。ただし既に歩道は確保されているので子どもたちの安全は確保できていると、そういった判断です。もし歩道が中途半端だったり、子どもたちの安全が確保できないようだったらば、予算から１回省くこ

とはしませんでしたけれども、そういう安全が保たれているということで骨格予算の中には、１回入れ込まなかったということですね。そういったかたちで２７６億円の予算を３月下旬の臨時議会に上程しまして、そして若干の修正をいただきまして、賛成多数で通過しているといった状況です。

じゃあ組み込めなかったものとしては何があるのか、いろいろとあるんですけど、その中でも特に教育関係で言いますと、小学校のプール改修事業だったり、後は、これは生涯学習になりますけども公民館､例えば仲津校区の公民館の１階の改修工事だったり、そういったもの、こういったものを省かせていただいたという状況です。

じゃあ骨格予算に入れ込んだものは何なのかということで、子育て、福祉、教育、文化、防災、それから地域、いろんなものがありますけれども、その中でも特に教育分野で言いますと、京築未来の地域リーダー育成プログラム事業、これは私の政策的な判断で今回やることにしたんですけれども、これは県の事業です。これはいま市が相乗りをさせていただくようなかたちでやる事業なんですが、これは今から動かないと、予算組しておかないと、このプログラム、間に合わないということで、骨格予算に入れ込ませていただきました。簡単に言うと、学校では学べないようなことを地域の大人たちなどが中に入ってもらって、そして子どもたちに経験をしてもらうと。これは全ての子どもたちに提供するのではなくて、中学生、手挙げ式ですね。申し込みがあった子どもたちが参加して、やるプログラムになります。それから中学校海外体験事業、これは４年ぶりですかね、アメリカのグレイス・チャーチ・スクールという所に行くホームステイの事業ですけれども、年によっては国連なんかに行ったり、今年度は国連に行くんですかね、行かないんですかね。

（事務局「はい」の声あり）

過去には国連に行ったりなんかもあったようなんですけれども、これも入れ込ませていただきました。これは参加者の募集をすぐにかけなければいけないということで、これもやはり骨格予算に入れ込まなければいけないということでした。

今までは､参加費だけで３０万円以上かかっておりました｡これは高いということで、本来だったら１０万円以下にしたかったのですが、過去との整合性、それから私の思いとしては、これから他にもこういう海外体験ができるような機会を子どもたちにもっとつくってあげたい、もっと安価な金額で、と思っておりますので、今回は整合性やこれから新しいプログラムをつくるということを考えたうえで、参加費は定額の２５万円、もちろんプラスアルファ掛かるんですけれども、これまでは参加費だけで３０万円以上掛かっていたところを２５万円に抑えるようなかたちで、中学校海外体験学習事業も入れ込んでおります。

その他にも､これは教育委員会のほうからしっかりあげてきてくれたんですけれども、

土日の部活の指導員の加配ですね、そういったものも入れております。

その他にも文化活動団体への補助金。私が就任してからすぐ、ビエンナーレという彫刻の国際公募展ですね、これも素晴らしい事業だったんですが、やはり費用対効果を考えたときに、そこにお金を、賞金だけで１千万円近くを掛けるのであれば、それ以外の市民の文化活動にもっと充てたいという思いがありましたので、まずは、今年度は１５０万円くらいですかね、文化団体に補助金を出すようなかたちにしております。

教育×まちづくり。サスティナブルな街づくりということで、持続可能なまちづくり、そのターゲットの世代は、ということで、教育行政と、あと市の行政というところで、あまり政治が介入しないようにというところも気遣いながらと言いますか、私も気にしながら一定の距離を置いたかたちでやっているつもりなんですけれども、ただ、やはり同じ方向、同じ目的といったものがあると思っております。それが何なのかというところを行政サイドの視点で皆さん方に御報告したいんですけれども、よく言う人口のデータなんですけれども、ちょっと古いデータになりますが、ことしの３月、世帯数が約３万４千、総人口がもう７万３千をとっくに切っています、７万２５２２人。で、年代別ですね。

じゃあこれが５年前はどうだったのかと言いますと、５年前と比較したら、実は世帯数が１，７００増えている。人口は６００人以上減っているんです。でも世帯数は増えています。これはいろいろな原因がありますが、１つの大きな要因としては高齢者の独居世帯がどんどん増えていっているという現状があります。それから０歳から１４歳、子どもたちもこの５年間で３００人以上減っております。１５歳から６４歳、１，０２３人減っています。６５歳、この高齢者は、当然のことながら、皆さん御承知のように増えているという状況です。

ですから行橋市も人口が増加しているということをよくおっしゃる方がいらっしゃいますけども、住民基本台帳という月１回ずつ出されるものに関して、これで見ていきますと確実に減ってきているという現状、これを押さえておいていただきたいということです。そして、じゃあ減るにしても高齢者が増えてきていて、高齢者ではない世代がどんどん減っていっている。これは由々しき事態だと思います。ただ、これも結構、日本全国共通するような課題ではあるんですね。東京とか名古屋とか福岡とか、そういった都市は、ここの人口もまだまだ増えていったりもしています。人口そのものが増えていったりしているんですけれども、地方都市になってくると、やはり減っていっているという状況です。

じゃあこの１５歳から６４歳まで、これを生産年齢人口と言いますけれども、この生産年齢人口が、やはり重要である、キモであるというふうに考えています。一番働いて一番稼いで、そして一番お金を使う、これが１５歳から６４歳までの生産年齢人口にな

ります。つまり、まちの活力にかかわってくる。だから逆に言うと、この１５歳から６４歳までが気に入ってくださるような、この方たちにとって魅力的な政策を打っていくことによって、生き残りをかけた政策を打っていく、ということになるわけです。

この１５歳から６４歳までの中でも、これは私が勝手に言っていますけれども、２０代後半から５０代の子育てど真ん中世代、ここにターゲットを絞った政策といったものを、常に意識しなければいけないと思っております。ちなみに２０代後半の根拠は何かと言うと、日本人の大体結婚する年齢というのが、女性の場合だったら初婚が大体２９歳、男性が３１歳、第１子を生む年齢が大体３０歳くらいだったと記憶しております。ということで、そういった人たちが子どもを産んでからまちを選ぶんじゃなくて、子どもを産む前から、このまちに住んで子育てをしたい、教育を受けさせたい、こういったところを考えたときに、やはり２０代後半というものが、ひとつ浮かびあがってくるのかなと思っています。

そしてやはり子育て、特に高校、大学までと考えたら大体５０代、人によっては６０代前半といった、それ以外といったものもありますけれども、大体このあたりといったものにターゲットを絞る。そしてこういった人たちが最も子どもの教育に関して関心のある世代だというふうに仮定をしております。

じゃあ現状はどうなのかということで、これは私がぱっと思いつくものを書いただけですので、皆さん方にも、本当はここでブレインストーミングなんかをしていただくと、もっといろんなものが出てくると思います。また実際、学校現場の先生だったり、実際の親御さんなんかに聞いたり、また、その親御さんでも、例えば発達障害のあるお子さんをお持ちの親御さん、あるいは重度の障害のあるお子さんをお持ちの親御さん、あるいはＬＧＢＴＱのお子さんをお持ちの親御さん、あるいはお祖父ちゃん、お祖母ちゃん、いろんな方々に聞けば、もっともっと現状課題が出てくると思うんですけれども、ここではちょっと簡単に私が思いついたものをあげさせていただきます。

まずは教員の数・スキル。これは教員不足といったものが全国的にも起こっているわけですけれども、その中でも福岡県、そしてその中でも筑豊・京築、こういった所では教員のなり手が少ない。これは比較的いろんな方々が御存じの事実だろうと思います。幾つかの要因が考えられますけれど、例えば教員を養成する大学、養成をしていくための大学といったものがそばにない。都会を経験した若者たちというのが、あまりこちら側に来たがらないとか、そういったお話をよく耳にすることができます。

またスキルという言葉を書かせていただきましたけれども、よく教員の質が低くなってきているのではないか、といったような御意見もいただくことがあります。でも、例えば競争率が高い所と競争率が低いところ、これは一般的に考えれば、教員のなり手が多い所のほうが、教員の質といったものが高くなってくる傾向がある、これは一般的に

考えれば当然のことだと思います。そういった意味では、競争率が低いということは、スキルあるいは教員の質が落ちてきている可能性が危惧される、といったところは、やはり意識すべきところかなと思っています。

それから、多様な子どもと表現させていただきましたが、先ほど申し上げたとおり、ＡＤＨＤ、それからＬＤなんかもそうですけれども、多動なお子さんだったり学習障害。僕もたぶん、子どもの頃は特になんですけれども学習障害・ＬＤがあったと思います。特にやはり文字、勉強は普通にできたんですけれども、読書スピードだけは異常に遅かった。高校のときも異常に俺は読書スピードが遅いなという自覚がありました。それからあとはＡＤＨＤの気も若干あったかもしれないですね。特に物忘れなんかは激しかったですね。いまだに１回、家を出て車に乗ったときに、あっ、ハンカチを忘れたとか、そういったことがありますけども、これは個性というとらえ方でいいんじゃないかなと思っていまして、要は社会生活を営むのにあまりにも支障があるといった場合には障害といった見方もできるのかもしれませんけれども、その辺は環境だったり人間関係でカバーできるもの、あるいはトレーニングでカバーできるものなのかなと思っています。いずれにしましても、様々な子どもたちが増えてきているということです。で、これに対応するだけの環境、あるいは教員の数もそうですし、教員の技術、知識、そういったものも、まだまだこれは課題としてあるのかなと思っています。

それから職場環境、これは働き方改革などで改善が進められていると思いますけれども、基本的にやはり教員、先生方の心とか体にも適度な余裕がないと、やはり質の高い教育、子どもへの良い接し方といったのは、ちょっと厳しくなってくるのかなと思います。

それから老朽校舎。これも長寿命化計画なんかを進めておりますけれども、学校に限らず公共施設がどんどん老朽化していっています。こういった問題を解決していかなければなりません。これもちょっと話し始めると、かなり深い話になりますので、ちょっと端折ります。

学級・学校規模。これは老朽校舎とかかわってくる部分もありますけれども、これも委員の皆さん方は御存じだと思いますけれども、例えばクラス替えができるくらいの、やはり１学年２学級くらいあったほうがいいんじゃないかとか、例えばいじめがあったときにでも、クラス替えができるというのが一つの改善策にもつながることもありますし、それからコミュニケーション能力とか社会性、そういったものを養ううえでも、やはり適度な子どもたちの数、学級数があるべきだ、私もそのように考えています。

また市全体の学校そのものの数も、やはりこれから考えていく必要があります。最初のデータでお見せしたように、子どもたちの数も減っていきます。大人の数もこれから減っていきますので、そうなると当然税収が減っていきます。その限られたお金の中で、

どうやって学校を回していくのか、運営していくのか。教育現場にお金の話を簡単に持ち込むべきではないと思いますけれども、一方でこういったところ関しては、やはりコストということを意識していかなければいけないのが現状だと思っております。

ちなみに、以前、学校の未来の基本計画といったところで、学校をどのようにしていくかという案を、一応過去につくらせていただいていますけれども、その中では、中学校は６中学校のまま残すといった案があがってきておりました。しかし、本当にそれでいいのかという議論を、実はそれこそ皆さん方にも御協力いただいて、もう１回考えていかなければいけない、というふうに思っております。

それから長期欠席者。この中に不登校も含まれるわけですし、長期欠席者というのは、多様な子どもも含まれると思っておりますけれども、特にこのコロナ禍になって、御存じのように、１３０人以上ですか、不登校と言われる子どもたちが増えています。この不登校の定義といったものも結構曖昧なものがあると伺っているんですけれども、いずれにしてもコロナにかかりたくないからとか、もうちょっと環境を整えてくれないと学校に行けない、という人もいれば、長く休んだことがきっかけとなって、ますます学校に行きたくない、という子どもたちも増えているようですし、あるいは学校教育ではない、また別の居場所といったものが必要だ、あるいはその居場所を見つけて、あえて学校に来ない、積極的に長期欠席者になっている、そういったお子さんもいらっしゃろうかと思います。

また細かいことを言うと、例えばタブレット端末をいま学校で普通に使っていますけれども、電磁波が気になるから学校はどうなんでしょう、という御意見があったりもしますよね。とにかく多様な子ども、多様な大人たち、多様な保護者、多様な考え方といったものがありますし、この長期欠席者については、どのように考えていくのかというところも、いま既に教育委員会でも、各学校なんかでも、その対策案を出してくださいということで、ちょっと呼びかけなんかをして動いているようでございますけれども、ここは、やはり公教育を担う我々としては、できるだけ様々なお子さんたちが楽しんで、笑顔で学校に来てくれる、そういった環境を目指すべきであろう、そのように思っております。一方で、もう一つの受け皿ですね、学校以外の受け皿も必要であろうかと思っています。

そして地域間格差。これは子どもたちにとってなんですけれども、例えば京築の子どもたちと福岡市の子どもたち、あるいは京築の子どもたちと東京の子どもたちとでは、例えば本物に触れる機会が違います。近くに劇場があれば、近くにスタジアムがあれば、中にはそこに無料で招待をされたりだとか、そういった機会が都会の子どもたちにはあります。しかし行橋の子どもたちには、そういう機会は滅多にありません。

仮に、例えば素晴らしい劇が福岡のホールでありますので見に行ってください、そう

いった案内が来たときも、実際はそこに行くことがかないません。１日潰して、そしてバスをチャーターして、そこに行かなければならない。そうなってくると、情報だったり機会、そういったものは都会と田舎、行橋とでは、やはり格差があるといったところですね。その逆もありますよね、非常に本当に海が綺麗で野山が豊かで、だとか、行橋も十分自然はあるんですけれども、なかなかそういう野山に触れたりだとか、逆に文化に触れたりする機会といったものが、まだまだこの地域は少ないのかなというふうに私は思っています。

それから家庭の問題。これは家庭という言葉にさせていただきましたが、家庭間の経済格差とか、あるいは道徳の部分、あるいはしつけの部分とかでの家庭間での違い、そういったものも大きく影響される、子どもたちには大きく影響されると思っております。特に今、何でもかんでも学校に求められる時代になってきておりますけれども、これは、僕は非常に酷だと思っておりまして、やはり今一度、家庭教育、親御さんたちに、もう少し意識変革をしてもらわなければいけないと思っていますので、即ち親へのアプローチも重要になってくるということでございます。

そして成績上位層へのアプローチ。公教育というのは、基本的には標準、もしくは、なかなか標準以下の、例えば、これは学力面での話ですけれども、そういったお子さんたちに照準を絞っていると私は考えています。じゃあ一方で勉強が滅茶苦茶できる、学校の授業が正直ちょっと物足りない、そういったお子さんたちへのアプローチが果たしてできているのか。結論から言うと、なかなかできていないというふうに思っています。ここは意識しない限り、ここはいつまで経ってもなかなかアプローチできないと思いますし、それこそ先生たちに余裕がなければ、ここへの対応はできません。

じゃあこれを行政としてどうするのか。このまま放っておくのか。勉強ができる子どもさんたちが、例えば京都高校に行くのではなくて、その他の学区外の学校に行く。これはこれで子どもたちの選択肢が増えたという見方をすればいいわけですけれども、やはりこの地域を担っていく子どもたち、この地域を支える私たちが、この地域をより良くしていくためには、ということを考えたときに、やはり進んで地元の学校に通いたい、そう思ってもらえるような環境をつくる必要があると思いますし、また学力がある子どもたちにとっても、公教育でも十分自分が学びたいこと、自分の能力を伸ばしてもらえているんだという自負を持ってもらえるような、そういった教育を提供する必要があるのではないかなと思っています。

それからＩＣＴ。行橋市は、導入は進んでおりましたけれども、その後の活用というものは、まだまだこれからいっぱいできることがあると思っています。

そしてコミュニティスクール。これも先ほどちょっとお話がありましたけれども、このコミュニティスクールは、私は、まだまだこれからだと思っております。仕組みは整

いました。全校でこの仕組みは整いました。ただ実際に学校以外の地域の方々が入って来るということは、いいことばかりではないと思っています。これは別に変な意味ではなくて、どういうことかと言うと、やはり多様な価値観を持った方たち、そしてときには学校の現状をあまり知らない状況で非常に厳しい御意見を言う方も中には入って来られるかもしれません。そんなところで例えば教頭先生が板挟みになったりだとか、そういったことは現実的にたぶんあると思いますし、現実的に既に起こっているんじゃないかなと思います。なので、このコミュニティスクールをどう生かしていくかといったところは、これから本気で考えていかないと、たぶん全国でも、このコミュニティスクールが機能する所と機能しない所というものが、いっぱい出てくると思います。

こんな現状があるとしまして、私は、一言で言うならば、きょうの表題にもありましたが、行橋の子どもたちには、どんな人になってほしいか。これは教育委員会でも、例えば確かな学力とか豊かな心とかがありますよね。それはその通りだと思います。これは一言で私が言うならば、自他のウェルビーイングを実現できる人。こういった人間になってほしいなと思っております。

じゃあウェルビーイングとは何か。これ、ウェルは良い、そしてビーイングは状態です。これは身体的、精神的、社会的に良好な状態、あるいは満たされている状態のことを一般的にウェルビーイングと言います。ですから単なるハッピーじゃなくて、そのいい状態が続いている状態、これをウェルビーイングと言います。例えば心や体が良好か、それから自分のキャリア、やりたいことができているのか。お金、少なくとも自分がしたいことをするだけのお金があるか、家族を養えるだけのお金を稼げているか、どうか。人間関係、家族、あるいは恋人、あるいは友達との関係が良好か。あるいは自分の居場所があるか、あるいは自分が熱中できるものがあるか。あるいは自分がしんどいときに癒してくれるものがそばにあるか。そういったところから総合的に、このウェルビーイング、満たされた状態、こういったものを実現できる人、これが究極の我々が求める人間像ではないかなと思っております。

じゃあこういったウェルビーイングを実現できる人って、どういう人なのかなということで、ちょっと簡単に、これも勝手に自分で、ブレインストーミングで考えたんです。

例えばかわいがられる人、愛される人、やはり嫌われる人より愛される人のほうがいいですよね。運のいい人、これは松下幸之助なんかがよく言っています。結構世の中で、いわゆる成功を収めた人たちなんかは、いや、自分は運がいいんですよね、ということを歴史上の人物も結構これを言っていますね。なんでか分からないけど自分は運がいいんですよ、恵まれているんですよ、というような、ある意味楽観的というか、どんなことでも前向きに考えられる人。それから対話力や疑問力、質問力のある人、こういった人たちというのは、常にやはり自分の考えをアップデートすることができますし、いろ

いろな人の価値観といったものを受け入れることができる、その基本となるものが対話力や質問力や疑問力ではないかなと思います。

それから俯瞰力や探求力、何々力と言ったらきりがないほどいっぱいあるんですけれども、例えば目の前にぐうっとはまっちゃったときに、ちょっと俯瞰して見られる力だったりとか、これだというものを没頭してできるとか、これは写真がありますが、うちの子どもなんかも、鉄道が大好きだったんですけれども、電車を扱うときには、とにかくそれしかしないというような状況でした。それは没頭力。同じようなところですが、それから実行力、実際に考えるだけじゃなくて動くことができる力。

それから他者を尊重できる人。それから他者の自己実現を応援できる人。自分だけのことじゃなくて周りの人たちのことも自分のことのように捉えることができる人。それからシビックプライド、これは、僕はよく使う言葉なんですけれども、シビックは市民、プライドは誇り、直訳すると市民としての誇り、つまり郷土愛という言葉がありますけども、まちを思う心ではなくて、まちを担っていくという自負心、これがシビックプライドです。このウェルビーイングを実現するためにシビックプライドが絶対になくちゃいけないとか、ここが全部なくちゃいけないとかじゃないんですけれども、この行橋で育ってもらうためには、行橋で育てたい子どもたちとしては、やはりこのシビックプライドをぜひ持ってもらいたいな、というところで入れさせていただきました。

それからメシを食っていけるという、ちょっと下品な言い方になっていますけども、あえてこういう言い方なんですけれども、やっぱりしっかりと自分を、大切な人を養っていけるだけの経済力、そういったものは、やはりあったほうがいいだろうという考えです。特に今この日本だったらですね。これがまた他国だったら、例えば戦争が起こっている状態だったらば、お金を稼ぐとか何よりも、それこそ、その日その日のメシを食っていく力といったものが求められるわけですけれども、今この日本だったらば、メシを食っていける、すなわちそれなりの稼ぎをちゃんとあげられる人、そういったイメージです。

それからどのような状況下、環境下でも楽しめる人、ポジティブシンキング。結局のところ、人生というのは、いろんなことをあげましたけれども、良いことばかりじゃなくて辛いことがたくさんあります。むしろそちらのほうが多いかもしれません。でも、そんな中でも前向きに考えられる、また周りの人を、くよくよさせるよりも、むしろ周りの人を笑顔にすることができる、そういった力を持っている人というのがウェルビーイングを実現できる人なのかなと思っております。

種は芽が出る、芽は伸びる、そういうふうにできている。これは、私が学習塾に勤めていた頃に出会った言葉です。勤め先の学習塾は、単に勉強ができる子どもというよりも、それこそメシが食える人間、後はやはり人生を楽しむことができる人間を育てよう

という学習塾だったんですが、結構私はそこの代表に影響されたんですけども、これってすごく僕は絶妙な言い方だと思うんですよね。子どもたちのことを言っているんですけれども、人って放っておいても育つよね、ということです。だけれど放っておいていいの、というような意味合いもこの中に含まれていると思うし、客観的な事実をここは言っているようでありながら、子どもたちの力を滅茶苦茶信じている言葉でもあると思うんですよね。

この、種は芽が出る、芽は伸びる、そういうふうにできている、というところで、私たちは実際に何ができるのかというところを、ちょっと簡単に考えたところ、多様な、これはあえて学びじゃなくて育ちという言葉にさせていただいたんですが、多様な育ちの機会を提供するということが、まさに我々大人たちがやるべきことじゃないかなと考えております。それはどこでか。家庭で、そして地域で、そして学校で。きょうは基本的に生涯学習とかリカレント教育とか、そういうことではなくて、子どもたちを取り囲むことについて、きょうはお話をさせていただいています。時間が限られていますので。

その中で、先ほど申し上げた家庭教育、これは大人たちのアプローチが必要です。ちょこちょこやっていますけれども、例えばスマホとの付き合い方とか、それから地域。この地域の中には住民はもちろんですが、企業も入ってきます。そして団体、これは地縁団体なども入ってきます。それから私たち行政も入ってきます。そして教育機関、例えば西工大や北九大とかもそうですし、あるいは幼稚園や保育園なども入ってくると思っています、こういった地域、そして学校現場。こういった機会を創出していく必要がある。つまりここはチームで動いて子どもたちにこういう機会をつくっていく必要があると思っております。

その中で、この多様な育ちの機会というのは、豊富な実体験と思考や実践の場のことを私はさしているんですけれども、例えば様々な価値観や異文化に触れる機会としては、海外研修、これはさっき少し申し上げました、アメリカのグレイス・チャーチ・スクールだけではなくて、他につくれないかなと、いま模索をしています。教育部長とも、ちょっとだけ、この辺を話しています。

異文化交流、これはいま実際に、これは今どこがやっていますかね、異文化の、例えば外国人の方を招いてやっているのは。教育委員会じゃなくて、どこでしたかね。市民教育ですかね。

（事務局「市民相談です」の声あり）

行橋市内に住んでいる外国人の方々を招いて、ちょっと話してもらったり、そんなのもやっています。

それから英会話の充実。僕は、これは学校教育の中に持ち込むかどうかは別として、これ、ぜひ皆さんと、これ教育長にも以前お話したんですけれども、１回ぜひ教育委員

の皆さんと、あと教育部の職員の皆さんと一緒に飯塚市を見に行きませんか。飯塚市は小学校の何年生だったか、ちょっと忘れましたけれども、フィリピンのセブ島だったかな、今も変わっていなければセブ島です。僕は何年前かに見に行ったときに、実際に英会話をタブレット端末を使って、イヤホンを付けてマンツーマンで英会話をする時間が１０分から１５分間あるんです、英語の授業の前に。で、これをやると何がいいかというと、やはりどんなに少人数であっても、英会話の学習をするときに、先生１人に児童生徒が複数人だと、やっぱり手を挙げる子どもと手を挙げるのが苦手な子ども、発言が得意な子どもとそうでない子どもと、どうしても差が出てくるんですよ。ところがイヤホンを付けてマンツーマンだと、もうその世界に没頭できるんですね。で、これはすごく評判を得ています。

小郡市なんかも何年か前に既にこれは始めています。しかも９月くらいに補正予算を付けて始めたとか言っていましたけれども、できれば時差のない、オーストラリアはちょっと高いので、フィリピンやインドネシアだったり、もしくはシンガポールもいいかもしれませんけれども、そういったところの英会話スクールと提携して、子どもたちに生の英会話に触れる機会をつくるとか、こういったものは、やっている所がありますので、１回視察に皆さんと行けたらいいなと思っています。

それから多様なニーズに対応できる環境ということで、これは個性ある学校、例えば小規模特認校のことをさしたりしているんですけども、行橋市には多様な子どもたち、多様なニーズということで、外国にルーツを持つ子どもたち、例えば親が日本語を話せなくて自分も日本語が苦手な子どもたち。外国にルーツを持つ子どもたち自体が、今年度はたぶん１３人ほどいまして、その中でも日本語が苦手な子どもたちがいます。日本語指導員の先生たちがいるんですけれども、実際は、子どもたちは各学校に散らばっているので、その先生たちが回って対応している状況なんですね。でも進んでいる地域になりますと、もう日本語拠点校といったものをつくって、まずはここで日本語を学んで、そうすれば先生が行ったり来たりする必要もありませんし、まずは一つの学校で日本語を学んでから、それから行きたい学校に散らばっても構わないし、そういったこともやっています。もう行橋もそれを本当は考えるべき時に来ていると私は実際に思っています。

それだけじゃなくて、例えばお友達関係でうまくいかなかったという子どもさんが実際に蓑島小学校に行ったりしています。もっともっと特認校であるならば、もっともっと個性を出していくべきだと私は思っています、生き残って行くために。そして、むしろここだから行きたいんだと思われるような個性ある特認校をつくるべきである、というふうに考えております。

それから居場所の創出。これは先ほど申し上げた学校以外での居場所、こういったも

の、これは教育分野になるかどうか分かりません、福祉の分野になるのかもしれませんけれども、こういった居場所の創出が必要だと思っています。

先だって、私もちょっと呼ばれましたけれども、北九州子どもの村学園、平尾台にあります小中学校ですね。ここは基本的にプロジェクト学習といったものをメインにやっている学校ですけれども、ここを卒業した行橋高校３年生の男の子がいるんですけれども、行橋でもこういったことができないか、と言われて、いや、ウエルカムですよ、と答えましたけれども、行橋がやるということじゃなくて、やってくれるならウエルカムですよ、と私は答えたんですけれども、ただ、要はいろんな子どもたちにとっての選択肢が、私はやはりあるべきだと思うんですよね。全てが公教育で賄うというのは、なかなか厳しいと思います。そういった意味で、ありがたいことに近隣に、平尾台にそういう私立の小中学校がある、これも一つありがたいことだと思います。またこういう居場所、それも何がしかのかたちでつくっていく、選択肢を増やしていく必要があるのかなと思います。

後それからもう一つ、これはぜひ一緒に考えていただきたいんですけれども、いま部活動の指導者、これを外部に委託する、これはいま動き始めていますが、私は、もう部活動で市内の中で競い合う時代は、終わったと思っています。それよりも、より優秀な、これは子どもの特性を分かっていて、そしてその分野に優れている優秀な指導者を、それこそ外部、遠方からでも呼んで来て、あるいはこういったＩＣＴを活用して、そして各学校間で競わせるのではなくて、日本や世界と渡りあっていく。これは人間としても、あるいはプレーヤーとしても、競技者としても。そういった子どもたちを行橋市としてオール行橋で育てていく、こういった視点が重要だと思っています。いま野球部あるいはバスケットボールのチームをつくることができないから、だから、どこどこ学校に私は行っています、という子どもがいます。そういうのじゃなくて、もう行橋全体で、バスケットをやりたいならば、行橋市バスケットボール部に集まれ。

私は、一番いいのはブラスバンド部、これは来年度予算をつけてできないかなと、実はこれは勝手に思っていることですが、思っています。なぜかというと、市長になって小学校を昨年、運動会のときに全校を回りました。その時に、仲津小学校って、ブラスバンドがあるんですよね。

○教育長　長尾明美君

はい、鼓笛があります。

○市長　工藤政宏君

鼓笛ですね。これ、仲津小学校に鼓笛隊があるのを知らなかった方は、ここにいる方で、ちょっと手を挙げてもらえますか。

（数名の挙手あり）

部長ですら知らないんですから。ありがとうございます。実はそうなんです。僕も知らなかったです。で、南小もあるんですかね。

○教育長　長尾明美君

北小があります。

○市長　工藤政宏君

北小があるんですね。

○市長　工藤政宏君

南はもうないんですね。

○教育長　長尾明美君

ないです。

○市長　工藤政宏君

昔はあったのかな。で、仲津の子たちなんかは、北小もそうですけれども、上の子どもたちが下の子どもたちに、それを引き継ぐ文化が育っているんですよ、伝統があるんです。で、上の子たちがやっている姿を見て、憧れの目で下級生たちが見ているんです。ところが中学校になったら、仲津中は、ブラスバンドは確かないんですよね。行橋市内で言うと行中と中京中学だったと記憶しています。もったいない、すごくもったいないんです。

じゃあ、いまダンスなんかは、今はどこもやっていますけども、日頃の練習は自主練でタブレット端末でできますよね。じゃあ週末は皆で集まろうということができる時代になったわけですから、もう、この学校に行かなきゃ私のやりたいことはできないとか、この学校は遠くだから、私は、やりたいことを諦めるという時代は、もうやめるべきなんです。行橋はこれを率先してやるべきだと私は思っています。

だから、もう部活を統合していく、行橋の子どもは行橋で育てる。特にまずは取り組みやすい文化活動とか、例えばブラスバンドのようなものは、私はできると思っています。後は問題となるのは先生方です。やっぱり先生方は自分のやり方にポリシーを持っていますから、例えばこの競技、俺はこのやり方、私はこのやり方で教えていく。やはり自負もあるわけです。でも、ここは先生たちと対話を重ねることで、本当に子どもたちの幸せ、子どもたちがこれから日本、世界で活躍していくため、そういったことを考えたときに、子どもたちの豊かな人生を考えたときに、どうあるべきかということを一緒に考えませんか、もうそういうことをすべき時に来ていると思っています。

だいぶ時間をオーバーしているようですけれども、その他に学校では教えてくれないこと、こういったこと、ユニバーサルマナー、これは実は職員で本当はもういち早くやろうと思っていた研修、これも６月議会に再提案、補正予算にあげますけれども、子どもたちにはいろいろな、起業家精神もそうです、デザインもそうですし、お金の教育、

文科省もいま高校生を中心に進めていますけれども、これ、どんどん企業なんかとコラボしてやるべきです。バンバンやるべきだと思っています。で、学校の先生たちに負担をかけないために夏休みや冬休みを利用して、まずはやるべきかなと思っています。あるいは総合学習の時間なんかでやってもいいかなと思っています。

この前段階として、今年度は県とも協力して地域のリーダー育成塾といったものをやりますけれども、来年度は、この辺はだいぶ踏み込んでやっていきたいと思っています。やれたらなと思っています。

そして本物に触れる機会。これもそうですね、さっき申し上げました都会のほうの子どもたちとこの辺の子どもたち、本物に触れる機会がやっぱり違うんです。ですので、こういった人たちを積極的に呼んで来たりするような機会、あるいは、ことしは福岡県が実施していますかね、福岡市の美術館に行くときなんかは、確か割引になったりするんじゃなかったですかね、県内の子どもたち。こういったことを、もっともっとＰＲしていって、芸術とかに触れたいという子どもたちがいたら、行橋市で準備できないものも外に出て行くときにサポートするよ、そういったこともやっていくべきだと思っております。

ということで、その他にも外遊び環境の充実、今度も泥んこで田んぼプロジェクトをまたやりますけども、３月にやったときの田んぼプロジェクトで１００人の子どもたちが参加してくれました。今回は水田で遊ぶプロジェクトを企画しています。これは民間の方が中心になっていま企画をしてくれています。

それから子育て世帯への支援。これは最近で言いますと、１人当たり１万５千円の支給、子どもエール給付金といったものをやっていますけれども、そういったかたちで子育て・教育のサポートをしていかなければいけないと思っています。

かなり抽象的であり、かちっとした話ではありませんけれども、こういったことをこれから行橋市ではもっともっと取り組んでいく必要があると、そのように考えております。

以上で発表を終わらせていただきます。御清聴、ありがとうございました。すみません、だいぶ早口で。

そうしましたら、もし何か御意見とか御質問とか、あるいは御自身でも、こんなことがやれたらいいなというお話がありましたら、御意見をいただければと思います。

吉兼委員から、どうぞ。

〇委員　吉兼法子君

ありがとうございました。私は、市長になられて、学校教育に、教育委員会に、どんなことを期待されているのかなということが、ずっと分からなかったんです、実を言いますと。でも、きょうのお話を聞いて、ぴたっと頭にフィットしました。ありがとうご

ざいます。私がやりたいなと思うところと重なる部分がたくさんあって、とっても展望が開けたような気がしております。

○市長　工藤政宏君

ありがとうございます。

○委員　吉兼法子君

海外研修や英会話の充実など、また多様なニーズで、部活統合すごくいいと思います。それから学校ではなかなか教えてくれない、例えば、私はこの中にお金教育なんかも、日本人は特にマネーリテラシー、弱いところですので、必要だなと思っていました。

また本物に触れる機会についても大賛成です。もうこれからの子どもは地球規模で考えて、そして地域で活動できる。そんな子どもにしていきたいと思っていますので、まさに市長がやりたいということとぴったり重なってよかったです。ありがとうございました。

○市長　工藤政宏君

ありがとうございました。

ちょっと言い訳がましくなるんですけれども、この１年間、本当にもう、てんやわんやの１年間だったんですよ。教育なんかも、まずはビエンナーレをどうするかというところ、それから図書館の契約、ここは、かなり実は教育部のほうもエネルギーを割いたところがあって、これは言い訳にならないんですけれども、僕も本当にもっと早く教育委員会の皆さんと意思疎通を図らなければいけなかった、これは僕の反省なんです。

ただ、１年経ちまして、まだまだ落ち着いてはおりませんけれども、子どもたちの成長は止めることはできないんですけれども、今からでもやれることとして、きょうちょっとお話をさせていただき、御意見、ありがとうございます。

では、桃坂委員、どうぞ。

○委員　桃坂克己君

きょうは本当にありがとうございました。吉兼委員とほぼ同じなんですが、やっぱりもやっとした感じが今まであって、私も２年少しやってきたんですけど、どうしても教育って、昔の教育が頭にあって、標準化といったところが、どうしてもクローズアップされるのかなと思っていて、今回お聞きした内容、このページなんか、まさに私も大好きなところで、私も企業人なので、弊社は４００億円の売り上げがあるんですが、それをどう振り分けていこうか、どう従業員をつくっていこうか、まさに同じことだなと。特に海外研修というのは、先ほど英会話のところもありましたけれども、あれは実はうちも従業員にやらせていているんですが、まさにニーズとしては合っているなと。

今後の子どもさんの教育でやはり一番大事になってくるのは、学校の間だけじゃないんですよね、結局ここで育っていって、ここで年をとってどうやっていくのかというこ

とを踏まえた教育というのが必要だと思います。まさに、こういたった考え方で進めていければ、他の地域にも誇れるようなことで、社会人になっていく。これからこれを具体化していくというところで、また相談させていただければなと思います。

○市長　工藤政宏君

そうですね。ありがとうございます。

ぜひ企業さんにも御協力いただきたいところがあって、例えば、もちろん企業さんもＣＳＲで社会貢献という部分で、ちょっと嫌らしい話になりますが、企業版ふるさと納税。これ例えば、ゆめタウンのイズミさんなんかは、別府市に２億５千万円ふるさと納税で寄附したりするんですよ。要は教育にふるさと納税をする、次世代を育てるという観点で、企業さんにお金の部分で協力していただくとか、あるいは今まさにおっしゃっていた、先だっても市内の企業さんたちを中心に集まる機会があって、そこで自動車産業にかかわる方たちがたくさんいらっしゃいました。要は中国とかタイとか東南アジアに進出していると、日本って、こんなに特異な国なんだというのを、海外に行って単身赴任して経験したと。日本が変わっているんだと。日本人はお行儀が良すぎるし、という話をされるわけですよ。

まさにその通りで、私は海外を放浪した程度と、ちょっとホームステイした程度しかないんですけども、日本がいかにやっぱり恵まれていて、信用の上に成り立つ文化、海外では騙されたほうが悪いくらいのところがあるので、やはりお行儀が良すぎちゃ世界では渡り合っていけないというのがあるんですよ。というのを考えたときに、例えば企業さんたちって、世界にいろんな工場、ヨーロッパにもあったりするじゃないですか。こういったつながりを生かしてホームステイとか研修ができないかとか、たぶんですねそれこそ対話、ディスカッションしていけば、まずやれるかどうかは別にしても、まず案はいっぱい出てきますし、その中で具体的なものって、たぶん実現化しようと思えば絶対にできるんですよね。

なので、ぜひまた、今度はできればお食事でもしながら、こういう対話ができればなと思います。

○委員　桃坂克己君

うちも９カ国に進出しているので、ぜひ応援したいと思います。

○市長　工藤政宏君

ありがとうございます。ありがたいお言葉です。

その他は、いかがでしょうか。

鬼頭委員、どうぞ。

○委員　鬼頭良典君

まず先生方の職場環境を守るというところがすごく大事だと思うんですよね。やはり

先生たちが元気じゃないと、子どもたちが元気にならないというのは、根っこに持っているところでございまして、その中で一番ネックになるのは、中学生で言うと、市長が言われたように部活動というところだと思うんですね。

今は国も県も言っていると思うんですけれども、部活の地域移行というところで、地域移行できるものは地域移行できるでしょうけど、１回それこそＰＴＡの関係で日Ｐに行ったときに、スポーツ庁からの直接説明、研修を聞いたんですね。その中で、モデルケースをずっと並べていて、そうするとやはり外部に委託しているんですよね、どこどこの体育協会とか、例えば大学とか、そういう団体に委託しているんですけど、でもこの現実問題を考えると、やはりやりたい先生にやっていただくというのが一番大事だと思うんですよね。部活動をしたいから先生になったんだという先生方もいらっしゃると思うし、やりたい先生にやっていただく。

でもそこに対しては、やっぱりしっかりと手当していかないといけないのかなと思うんですね。今は確か２，７００円くらいですかね。県の絡みとかでいろいろあると思うんですけれども、ここの兼業、兼職を認めてというところも、そのときの説明ではあったので、そういったところでやりたい先生にしっかりと金銭面で、報酬面で手当てしていくというのは、とても重要なことだと思うので、ただ単に地域移行すればいいというわけではなくて、やはりやりたい先生に手厚く手当していくというのが、とっても重要だと思うんですよね。

○市長　工藤政宏君

たぶん、そうですね、おっしゃりたいことは、すごく分かります。どちらも僕は重要かなと思っていて、まずやりたい先生、意欲のある方にやってもらうというのが、これはやっぱりすごく大切なことだと思います。

じゃあ問題は意欲、後は向かおうとする方向性がどうなのかとか、例えばいくら頑張っても努力する方向性が間違えていたら駄目なわけで、方向性って重要じゃないですか。子どもたちに例えば指導するときに、意欲がある、熱意がある、でも叩いて教える先生は駄目なわけじゃないですか。やっぱりそれはいま時代というだけじゃなくて、プレーなんかにも、やはり叩いて教えると、また怒られちゃうと萎縮していいプレーができないという、これはもう証明されているんですよね、だから自分たちで考えてやってもらったほうがいい。

なので、やる気がある先生をいかに生かしていくかというのを考えたときに、例えば行橋市として子どもたちを伸ばしていくために、どういう指導方法をよしとするのか、そういったことを共通した指導方法というか概念を学ぶような、一緒に学び合うような機会というのは、一方で担保していかなければいけないのかな、というふうに思います。

ですので、実は指導者で子どもたちをどんどん伸ばしていくような指導者さんが全国

でいるわけですよね。例えば高校野球で言えば大谷翔平選手の監督だったりとか、他にもいるんですけども、この辺で言えば、最近だったらアモールのサッカーチームは、どちらかというと子ども時代はとにかくボールに触れることを最優先させて、あまり筋トレとかもさせない。とにかくサッカーが楽しいということを第一にしています、というふうに言っていました。そういった、よしとする、こういう指導方法がいいよねというのを、ある程度皆で共有できるようなものというのは、つくり上げる必要があるのかなと思います。そこも共有できたうえで熱意ある先生ならば、もうウエルカムですよね。必ずしも地域移行というのは、完全にもう学校の先生を排除しますよ、ということである必要はないと思います。

〇委員　鬼頭良典君

もう１点いいですか。あと家庭教育の充実というのは、すごく大事だと思います。保護者の学びの機会というか、もちろんＰＴＡとしての役割は、あるのは承知の上ですけれど、市として保護者の教育ってすごく大事だと思うんですよね。保護者と子どもの価値観は違ってきているので、もう文化が違うとはっきり言ってもいいと思うんですけれども、そのすり合わせというか、そういうところが保護者向けの研修会というか、そういったところも充実していく必要があるのかなと思います。

〇市長　工藤政宏君

そうですね。知識の部分と実感の部分というのが、大きく分けて２つあると思っていて、知識は、例えばスマホとの付き合い方もそうでしょうけれども、実感の部分というと、これはちょっと手前みそというか、私が本当にこの人はいいなと思ったからこそ、行橋に何回か呼んで来た人がいて、それは学習塾での上司だった人なんです。この人は何が良かったかというと、保護者向けの話が、めちゃうまかったんですよ。

親への教育となるとついつい、こうあるべきですよね、とか、なりがちなんですよ。それがこの上司の話はそうじゃないんですよ。いろんな事例を出して、思わずお母さんたちが納得・共感して涙を流すみたいな話なんですよ。涙を流したり、もしくは、そうそうそう、それそれ、みたいな。要は特に核家族化してきて、特に小さなお子さんと母親が一対一で向き合う時間って、長くなったりするじゃないですか。ましてや男性なので、お母さんたちの本当の産みの苦しみとか、密室で子どもとマンツーマンでいる時間とかって、たぶん男性では耐えられない人って正直多いと思うんですよ。これは男女差別をしているわけじゃなくて、知らず知らずのうちに、お母さんたちがストレスを抱えちゃう。結局共働きの家よりも、実は専業主婦の家のほうが子どもへの虐待のパーセンテージが高いというデータを、確か僕は過去に見たことがあるんです。

つまり外に出ると、外からの評価がいただけるから、でも専業主婦って評価をされないから、当たり前だと思われているから。だから、つまりお母さんやお父さん、それぞ

れ母親向けとか父親向けの研修というか、お互いの苦労を共感したり、子どもの特性を知りましょうよという、ちょっと緩いかたちの学びの場というか、共有の場というものは、つくろうと思えばつくれます。過去、僕は個人的に何回かそういうことをやったことがあります。

一つだけ、僕はよく例え話で言うんですけれど、子どもの特性を知っているだけで、頭ごなしに怒る必要がなくなることって、いっぱいあります。よく僕が例に出すのが、たぶんここにいらっしゃる方もそういう人、特に男の子は多かったと思うんですけれども、小学校低学年とか幼稚園・保育園の頃は、椅子に座っていて、先生が静かにしなさい、と言っても、座って椅子を揺らしていたりする子がいるじゃないですか。こういうことをやるんですよ。これは、なんでかというと理由があるんです。これは何かというと、大人はじっとしていても、ずっとこのままいられる。心臓のポンプ力が強いからです。子どもの頃って心臓のポンプ力が弱いから、もう生理現象で脳から指令がいくんですよ。体を動かして、筋肉を収縮させて、血液を全身に巡らせて、と。子どもは体を動かすことによって血液を全身に巡らせるんです、そして酸素を頭に送るんです。これは生きるために当たり前のことなんです。それを分かっていれば、例えば子どもに勉強を教えるときでも、落ち着きがなくなってきたら、よーし、皆１回立とうか、ちょっと１回体を動かそうか、と言って体を動かして、よし、じゃあ深呼吸、じゃあ集中、というふうにすれば、衝突する必要がないんです。

例えばボタン付けなんか、例えばカルガモ理論というのがありますけども、これはよくダンスなんかでもそうですよね。指導者が生徒のほうを向くのではなく、背中を向けて同じ方向でダンスをやったほうが、習得が早いわけですよ。これは、幼児は同一方向を向くという言い方があるんですが、同じ方向を向いたほうが、習得がはるかに早い。小さい子にボタン付けを教えるときに、小さな子の後ろに回って同じ方向を向いてボタンを付けたほうが、習得が早いわけです。

こういうことを子どもの特性を抑えておけば、もっとスムーズにいくことって、いっぱいあるんですよね。こういったことなんかを学ぶ機会というのは、実はプログラムとしてあったりもします。これは何か保護者に対して、こうあるべきですよ、学びましょう、というのではなくて、ちょっと皆でお茶しながらという感じで、そういう場をつくっていくというのは、これはできますよね。やるべきだと思っています、やりたいなと思います。

○教育長　長尾明美君

村上委員は、どうですか。

○委員　村上信哉君

いいですか、時間は大丈夫ですか。

○市長　工藤政宏君
　１つくらい大丈夫ですよ。
○委員　村上信哉君
　ありがとうございました。本当に今までずっと方向性が分からなくてきましたので、すごくきょうは学ばせていただきましたし、ただ、学校の今までの話し合いの中で、多かったのが、修繕、修繕、修繕で、結局なかなか新しいことを生み出せない、他のことのほうにお金がかかってしまっていて、という話がほとんどだったような気がするんですよね。そんな中で、先ほどお話があった学校を統合じゃないですけれども、本格的に学校をどういうふうにしていくかとか、特別な学校にしていくとかいう考え方を、やっぱり首長という方が先頭を切って、この方向でいくぞと言っていただくと、皆さんが具体的に動きやすいと思います。
　こういうことも本当に１つ１つが事例になりますので、これを今度具体化していくときに、こういうふうにやりましょうというような、何か大きな方向性というのでしょうか、それがもう少し具体的に、これからなるんでしょうけども、そこがまた楽しみなところではありますので、きょうは本当に方向性がよく示されて、ありがたかったなと思っています。
○市長　工藤政宏君
　ありがとうございます。ちょっと私も、この１年間バタついていたというのもあるんですけど、教育行政と私、首長、執行部の距離感というものを、どう保てばいいのかなということで、正直、感覚を掴みかねている部分がありました。なので、まさに総合教育会議というものが、やはり大きな機会になるんだなというのを、私もきょう実感したところです。
　重ね重ねになりますけれども、今度はお食事でもしながら、またざっくばらんなやり取りができればなと思っています。ぜひよろしくお願いいたします。
○教育長　長尾明美君
　ありがとうございました。今日は課題も共有できたと思いますし、方向性も共有できましたので、またぜひ次の機会をより具現化したような内容で論議できればなと思っております。引き続き予算もよろしくお願いいたします。
○市長　工藤政宏君
　承知しました。
　それでは、進行を事務局に戻します。

４．その他
○教育政策係長　末次麗子君

ありがとうございました。本日の協議事項は以上でございますが、その他で何かありましたら、お願いいたします。

（「ありません」の声あり）

５．閉会

〇教育政策係長　末次麗子君

それでは、以上で令和５年度第１回総合教育会議を終了いたします。

今後の総合教育会議開催につきましては、また改めて日時等を事務局から連絡をさせていただきます。

本日は、お忙しいなか、お集まりいただきまして、ありがとうございました。

（「ありがとうございました」の声あり）

閉会　１４時０４分